関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

すべて

著者	イソゲボルク バハマン, 脇坂 豊
雑誌名	独逸文学
巻	8
ページ	A1-A25
発行年	1962-10-20
その他のタイトル	?Alles" von Ingeborg Bachmann
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017683

すべて

インゲボルク・バハマン
脇阪　豊訳

ぼくたちが石の壁で遮ぎられている二人のように、食卓に向いあうとき、あるいは夕方、ぼくたち二人とも入口に同じときに錠をかけようと思いついてドアのところで出会うとき、ぼくたちの悲しみが世界の端からもう一つの端に懸る弧のように、つまりハンナからぼくにむかって届いているのをぼくは感ずるのだ――そしてこのピンと張りつめた弧には、不動の蒼窮の中心に射当てられるはずの一羽の矢がつがえられている。次の部屋を通ってぼくたちが引返えしていくとき、彼女はぼくの二歩先にいる。彼女は≪おやすみなさい≫とも言わないで寝室に向う、そしてぼくは、ぼくの部屋に逃げこみ机によりかゝる、しかし彼女のうなだれた頭が眼の前に、彼女の沈黙が耳の底にいつまでも凝り固って消え去らないのだ。彼女は横になって眠ろうと試みているのか、それとも眼をさまして待っているのだろうか。なにを待ちかまえているというのだ――彼女が待つものはぼくではないのだから。

ぼくがハンナと結婚したのは、彼女のなかに子供が予見されていたからで、彼女ゆえのことではなかった。選択も決心もぼくにはいらなかった。新しいものそしてぼくたちの力による何かが芽生えていたし、ぼくには世界が大きく成長し始めたと思われたので、ぼくの心は動いたのだった。丁度新月がその軌跡をたどりはじめるとき、やさしく微風のような色をたゝえて懸っているのをみると、ひとびとはそれに向って三度お辞儀をしなければならないように。ぼくが以前には知らなかった放心の瞬間が生じた。事務所で――もう沢山と云う程の仕事をかかえているときですら――あるいは会議のときに、たゞ

子供のことしか考えられないような、そんな状態にぼくは突然おちこみ、この未知の影法師のようなものが閉じこめられている、あのあたたかい、光のさしこまぬ肉体の中にまでぼくの全ての考えがむかうのだった。

ぼくたちの待ちもうけていた子供は、ぼくたちを変えて了った。ぼくたちは殆んど外出せず友人たちを省りみなくなった。以前のよりも大きな住居を探し、住み心地をよくしそこに根を下すことになった。しかしぼくが待ちかまえていた子供のために、ぼくにとっては全てが変化しはじめた。丁度かくされた地雷のうえに思いがけなく誰かが通りかかったときのように、その爆発力におどろいてぼくはあとへ身をひかねばならないのかと考えたものだ。しかしぼくはその危険を意識することもなく歩みつづけたのだ。

ハンナはぼくを誤解した。ぼくには乳母車の車輪が大きいのがよいか小さいのがよいかの区別はできなかったので、どちらでもよいように思った。（ぼくはほんとうに知らないんだ。お前のすきなように。でもぼくはおまえの言うことを聞いてるよ。）ぼくたちは一緒に店に入る、彼女は子供の上着やおしめを選び、だがぼくがそれにかまわないと言ってぼくを責めるのだった。しかしぼくはほんとに一生けんめいだったのだ。

ぼくのなかで生じたことを、ぼくはどのように言い表わせばよいのだろう。ぼくの味った困惑は丁度ある野蛮人のそれに似ていた。それは彼の活動しているこの世界、炉と臥床（ふしど）とのあいだ、日の出と日の入り、狩と食事とのあいだに、彼が動きまわっているこの世界は、数百万年の齢いを経、そして消滅していく筈のもので、非常な速さで自転して、太陽のまわりを駆け廻っている多くの太陽系のうちの、とるに足らぬ辺りに存在しているそんな小っぽけな世界なのだと言うことを、突然に説明された一人の野蛮人のような具合だった。ぼくは突如として自分を、

自分と子供という新しい関連のもとにみた。その子供はある既定の時点、十一月の始めか中頃にその生命を担ってぼくたちの仲間入りをする筈だった、かつてのぼくやぼくの以前の全ての人たちとまったく同じような調子で。

このことはなんとか間違いなく想いうかべてもらいたいものだ。この完全な系譜を。丁度睡りに入るまえに黒と白の羊を唱えるように（黒い羊、白い羊黒い羊、白い羊という具合に）、それを唱えているうちにやがて意識がうすれ、ねむくなるかそれとも失敗してすっかり眼がさめて了うかのあの心像のようにだ。ぼくはこの方法で一度も睡りこんだためしがない。このことをハンナは母親から教っていて、それは睡眠剤よりもよく気分が落つくと確言するのだが。殊によると次のような連鎖を考えるのは、多くの人たちにとって心の休まることであるかもしれない――そしてセムはアルパクサデを生んだ。アルパクサデは三五才のときシラを生んだ。そしてシラはエベルを生んだ。そしてエベルはペレグを。ペレグは三十才のときリウを、リウはセルグをそしてセルグはナホルを生んだ。そしてみんな他にも多くの息子や娘たちを生み、息子たちはくりかえし息子たちを生んだ。つまりナホルはテラを、テラはアブラム、ナホルそれにハランを生んだ。ぼくはなんどかこの過程を考えぬこうとしてみた。始めからだけではなく、終りの方からも、かれらからぼくたちは多分血統を承けついではいないはずのアダムとエバへと、あるいはまた、殊によるとぼくたちの発生の源になるかもしれぬ全人類一般に至るまで遡ってみようとしたものだ。しかし、何れにしても、この連鎖が消えて了う暗闇がある、だからそれはアダムとエバに行きつこうと、他のどれかの一組にしがみついて了おうとそれは大したことではないのだ。ところがそんなふうには考えず、むしろそのむかしに、ひとりびとりがどのような系列のなかにいたのかを尋ねようとすると、その連鎖はどこから始まってどこ

に終るかが判らなくなり、全ての出生を、最初と最後の生命をどのように説明してよいのか途方に暮れることになるのだ。各々の参加者は眼前の競技をなんとかものにしたいのだが、それはただ一回限りのものなのだ。つまり生殖や養育、経済や政治といったものがそれだ。そこで彼は金や感情、仕事や創造に考をめぐらし、そして思考と呼ばれている競技法則が間違いないかと確かめることになるのだ。

ところがぼくたちは、もう一たび子供をこしらえて了ったのだから、それに甘んじなければならない。競技には選手がいるものだ。（それとも選手たちが競技を求めているのだろうか。）ぼくも矢張り深い信頼の念とともにこの世に生みだされた、そしていま、一人の子供をこの世に送ったのだ。

こう考えるだけでぼくはもう身震いがしてきた。

ぼくは子供の身の上に起りそうな、**すべて**のことを予想し始めた。ぼくの手は子供にふれ、それを抱き上げることだろう。四階のぼくたちの住居、カンドル通り、第七区、道を横ぎり町をぬけてプラーターの草原へと、そして、彼の目に入ってくる全世界をぼくは彼に説明してやることだろう。その子は、ぼくから机や寝台、鼻や足などの名前をきくことだろう。それにまた精神とか神や魂というような言葉、それはぼくの見解によれば役に立たない言葉なのだが隠しておくわけにもいかないものだ。そしてのちには、共鳴、透明陽画、一千年平和説それに天文学といったような扼介な言葉。あらゆるものがどんな意味をもち、あらゆるものがどのように用いられるかを、ぼくの子供は学んだ、そしてぼくはそれに気を配らねばならないのだった。扉の把手と自転車、うがい水と書式用紙。ぼくは頭がぐらぐらするのだった。

子供が生れてきたとき、もちろんぼくにはこの大へんな授業を行うよしとてなかった。子供はそこにいた、黄疸にかかり、しわくちゃの憐れな恰好で。咄嗟にぼくは何の手を下すべきようもしらなかった

――ぼくはその子を命名しなければならなかった。大急ぎでハンナとぼくは意見をまとめた、ぼくたちは三つの名前を書き出した。ぼくの親父、彼女の親父、それにぼくの祖父さんの名前だ。この三つからは結局なに一つ借用されなかった。最初の週の終りにその子はフィプスと名付けられた。どうしてそんなことになったのかぼくには分らない。いやぼくにも多分罪はあるのだ、というのもハンナはその子を意味をもたない綴の愛称で呼ぼうとして全く飽きることを知らぬげに綴の組合わせに没頭していたし、ぼくも同じようにやってみたのだから。なぜといってこのちっちゃな裸んぼうには、本ものの名前など、どうしても似あいそうになかったからだ。あれこれとなだめすかしたあげくに、ときとともに益々ぼくをいたみつけることとなった、この名前が出来上った。それのみか、ときにぼくはその名前を子供じしんのせいにもした、まるでその子が拒むことも出来たかのように、まるで全てが偶然ではないかのように。フィプス！ぼくは彼をそう呼びつづけねばならない、彼を笑いものにし、死んでからもそしてぼくたちをも一緒にそうしなければならないのだ。

フィプスが眼覚めたまゝ或いは睡りつゝうす青色のベットに横たわっていたころ、ぼくに出来ることとてはよだれや酸っぱいミルクのしたたりを口もとから拭きとってやることとか、彼が泣きだせば彼を楽にしてやれるのだと思いこんで抱き上げてやったりすることであった、その頃、彼がぼくに対して何かを企らんでいるらしいと、そしてその真相を確かめるには、暫らくのときが必要らしいと、始めて考えついたのだった。そうだ、どうしても時間の経過が必要と思われた、丁度幽霊が誰かの前に現われては暗がりの中に姿を消し、再び同じようなさだかならぬ目つきをしながらやってくるように。ぼくはよく彼のベットの横に腰を下し、殆ど動きのないその顔を見下していた、その何処を向いているのかはっきりしない眼をのぞきこみ、その謎をとくには何の

手がかりもない伝来の古文書のような顔付を考察したものだった。ハンナがこの最も親しいものについて何の迷うこともなく、育児書の通りに飲みものを与え、寝かしつけ、目をさまさせ、ベットを移しかえ、おしめをあててやるのをみてぼくは楽しかった。彼女は子供の鼻を小さくまるめた脱脂綿で拭いてやり、その肥った股の間に天香粉をまきちらした。まるでそうすれば、彼も彼女も何時までも救われているかのように。

数週間後彼女は最初の笑顔を彼からひきだそうとしてみた。ところで彼がぼくたちをびっくりさせたものとては、ただ不可解なしかめ面があるのみで、それはぼくにはなんの関係もないものだった。彼がその眼をぼくたちにむけ、あるいはその小さな腕をぼくたちの方に差しだすことが段々と数多く、より正確になってきたときにも、それは何の意図もなく、ただぼくたちが、何時かは彼によって許容されるかもしれぬその意味ずけを探しているだけなのだと、こんな疑惑がぼくの心に生じたのだった。ハンナは、そして多分どんな人も、ぼくを理解することはなかっただろう。しかし、このときにぼくの不安は始まったのだ。ぼくは惧れた、その頃ぼくはすでにハンナから遠ざかり、ぼくの本当の考えから彼女を閉め出し、そして遠くの方に留めておこうとし始めたのだった。ぼくは子供の弱点をぼくのうちに発見した——その子がぼくにそれを発いてみせたのだ——それは敗北に向うあの感情だった。ぼくはハンナと同じ三十才であった、そのとき彼女はかつてなかったほどに可愛いく若々しく見えた。しかしぼくには、その子は新しい青春を与えてはくれなかった。彼が自分の領域を拡大するに応じて、ぼくはぼくの領域を縮めていった。子供が微笑し、歓声を、泣声をあげるたびにぼくは壁ぎわに身をよせるのだった。ぼくにはこの微笑を、このおしゃべりを、この叫び声を芽生えのうちにつみとる気力はなかった。ほんとうはそうすることがぼくのためには必要なこ

とであったのだが。

ぼくのために残っていた時間は急速にすぎ去っていった。フィプスは乳母車の中でしゃんと坐るようになり、最初の歯が現われ、さかんに泣きわめいた。やがて身を起し、よろめきながら立上り、みる間にしっかりと立つようになった、四ん這いで部屋の中をころげまわっているうち、ある日始めての言葉が口からもれた。もうその進展をはばむことはならず、そしてぼくは相変らず何をしてよいのかを知らなかった。

一体何をしろというのか。以前はぼくも考えたものだ、彼に世の中を教えてやらねばならないと。彼と沈黙の対話をするようになって以来、ぼくは惑乱し別な人となりを身につけていた。例えば彼に事物の名称をかくし通したり、品物の使いかたを教えずに過すことが、ぼくには出来ただろうか。彼は第一の人間であった。彼とともに全ては始った、そして彼のために全てが完全に変化すると約束されていない訳でもなかった。彼に世界を委ね、白紙のまゝの世界を彼に与えてはいけなかったのだろうか。ぼくは彼に目的や目標を、善と悪とか、また本当のものとただのみせかけのものとかいうことを教え込んではならなかったのだ。なぜぼくは彼を自分の方にひきよせ、彼を知り、信じ、また喜ばせたり悲しませたりする必要があっただろうか。ぼくたちが立っているこの世界は、ありとあらゆるもののうちで最もいまわしいもの、ところが今日に至るまで誰からも理解されたことのないものなのだ。しかし彼の立っているところではまだ何事も決定はされていなかった。まだなにも。それはあとどれほど続くものであろうか。

ところでぼくは突然に悟った。全ては言葉の問題なのだ、そしてそれはただ、この世を惑わすためにバビロンの地に生れたこの一ドイツ語の問題ではない。それというのも、その底にはなお一つの言葉がくすぶっているのだから、それは表情やまなざし、

思考の展開や感情の進行にまで及ぶものであり、その言葉の中にはすでにぼくたちの全ての不幸がひそんでいるのだ。この子供が一つの新しい言葉を創造し、新しい時代を開始するに至るまで、果してぼくはこの子供をぼくたちの言葉から守り通すだろうか、全てはこの問にかかっていた。

屢々ぼくはフィプスと二人だけで家を出た、そして愛想づくり、媚態、戯れなどのハンナが彼に教えこんだものの跡を発見しては恐怖の念にうたれた。彼はぼくたちに似てきた。しかしただハンナやぼくにのみでなく、一般の人間すべてに。しかし、彼が自らを支配する瞬間があった、するとぼくは切実な想いで彼を観察するのだった。全ての道は彼にとって同じものであり、全ての生きものは彼にはひとしかった。ぼくたちは絶間なく彼のそばで忙しくしていたから、ハンナとぼくは彼にはほんの少しだけ親しかった。それは彼にとってどうでもよいことだった。それはあとどれほどに続くものであったろうか。

彼は物におびえた。しかしなだれとか悪意とかにではなく、木の枝に揺れている一枚の葉に、一匹の蝶におびえた。蠅は彼を途方もなく驚かせた。そしてぼくは考えるのだった、もしも大きな木全体が風にゆれ、ぼくが彼に充分の説明を与えられぬとき、彼はどのようにして生きていけるのだろうと。

彼は隣家の子供と階段の途中で出あう、彼はその子供の顔をめがけて無器用に手を突き出す、或いは目の前に一人の子供がいることに気付かないのかもしれないのだった。以前かれはいやなことがあれば叫び声をあげた、しかし、いま彼がそうすれば、事態は一そう悪くなるのだった。寝(ね)につくまえ、あるいは彼を食卓に坐らせようと抱き上げるとき、あるいは頑具をとりあげられたときなどに、それは屢々起った。彼の身内には大きな憤りがこめられるのだった。彼は床の上に横たわっておれなかった、絨毯(じゅうたん)の中に固く爪を立て吠えたて、遂に彼の顔は土けい

ろに変り、口のまわりには泡がふき出てくるのだった。眠っているときでも彼は叫び声を上げた、まるで吸血鬼が彼の胸の上に腰を下したかのように。この叫びを聞いてぼくは、彼がなお叫ぶだけの自信があり、その叫び声の効用のある事実を認めるのだった。

嗚呼、あるひのこと。

ハンナは優しい叱言をいいながら歩きまわり、彼をやんちゃさんと呼んでいた。彼を抱きしめキスしまじめな顔付で彼をじっと見、母さんを怒らせないようにとさとすのだった。彼女は驚くべき誘い手だった。毅然としてこの名づけられぬ流れの上にかがみこみ、彼を引き上げようと試み、ぼくたちの岸辺をゆきつもどりつしては彼をチョコレートやオレンジ、うなり独楽や熊のテディで誘いよせるのだった。

木々が影を投げかけるとき、声がきけるだろう、とぼくは考えた。彼に影の言葉を教えるのだと。世界とは一つの試みなのだ。そしてこの試みがいつも同じ方法で繰返えされ、同じ結果に至るのはもう沢山だ。別な試みをしよう。彼を影のもとに連れていこう。今迄の結果はこうだった、罪の中の人生、愛と絶望。（ぼくは全てを一般化して考え始めた、するとこんな言葉を思いつくのだった。）しかし、ぼくは彼に罪を免れさせ、愛とそして悉くの災厄を彼のために防いでやり、別な人生のために彼を解放してやることが出来るのだろう。

そうだ、日曜日には彼とともにウィーンの森をさまよい、とある水辺にくれば、ぼくの心の中に声がするのだった、彼に水の言葉を教えるんだ。石にも木の根にも同じ声がした。彼に石の言葉を教えるのだ。新しく彼を大地に植えつけるのだ。木の葉が舞い落ちていた、再び秋だったのだ。彼に木の葉の言葉を教えよう！

しかしぼくはこのような言葉をなにひとつ知らずまた見出すことも出来ず、ただぼくの言葉があるのみで、その境界を越えることは出来なかったから、

ぼくは黙って彼を抱き道をゆきつもどりつし、彼が文章を綴り、寝(ね)につくその家に再び帰るのだった。彼はすでに望みをあらわし、願いを口に出し、命令しまたときにはただ喋るためにのみ口を開いた。時のたつにつれ日曜の散策では、草の茎をひき抜き、小虫をつまみ上げ甲虫(かぶとむし)をつかまえたりした。はやそのときは、それらも彼にとっては同じたぐいのものではなかった。彼はその虫たちを調べ、ぼくが丁度よいときに手からとり上げなければ殺すのだった。家では本や紙箱を、そして自分のあやつり人形をこわした。彼は手あたり次第にひったくり、かみつき、手をふれ、そして投げすてたり自分の腕に抱えこんだりするのだった。おゝ、いつの日か、いつの日か彼は悟ることになるのだろう。

この頃ハンナはまだぼくに話しかける習慣をなくしてはいなかったが、フィプスが喋ったことをよくぼくに報告したものだった。彼の罪にけがれぬまなざしに、話しぶりに、そしてその仕ぐさに彼女は魅せられていた。ところがぼくは、子供の中に罪なきあかしをどうしても発見できなかった、それはあの最初の数週間いらい抵抗する力もなくただ黙って過されている日日と同じことであった。そして、その頃それは罪なきためのことではなく、表現の力ないゆえであったのだろう。それはちっちゃな肉と外皮との一つながりのもの、かすかな呼吸をして大きな鈍感な頭をつけているものにすぎず、その頭は丁度あの避雷針のように宇宙の使者たちのエネルギーの分散に供されているものだった。

家の横の袋小路で、大きくなったフィプスはよその子供たちと遊ぶことをよく許されていた。あるとき、ひる休みにぼくが家に帰ろうとして通りかかったとき、彼が三人の仲間と一緒に罐詰用の空かんで道の縁石(へりいし)に沿って流れている水を汲み上げているのをみた。彼らはそれから輪をつくって立ち話をした。それは何かの相談をしているように見えた。

(技術者たちは、どこから穿孔(ボーリング)を始めるべきか、ど

こから掘りだすべきかなどを、こんなふうに協議しあうものだ。）彼らは舗石の上に膝をついた、彼らが再び立ち上り舗石を三つ分先へいったとき空かんを持っていたフィプスはすでにそれから水を注ぎ出すように身がまえていた。しかしこの場所も彼らの計画には都合よくなさそうだった。彼らは再び身を起した。さっと緊張した空気がみなぎった。なんと男らしい張りつめた気分！何かが起きるにちがいなかった。そして彼らは、一米前方に恰好の場所を発見した。彼らはまた黙ったまま膝まずいた、そしてフィプスは空かんをかたむけた。汚ない水が石の上を流れた。彼らはじっとそれを見つめていた。黙って、おごそかに。あることが起り完成された。恐らくは成功したのであろう。成功したに違いなかった。世界はこの小さな男の子たちに身を委ねることが出来、そして彼らは、この世界をさらに押しすゝめたのだ。彼らはもっと押しすゝめていくことだろう、そのときぼくは信じて疑わなかった。ぼくは家に帰った、階段を上り寝室に入り、ベットに身を投げだした。世界はさらに押し進められたのだ、その出発点が発見されたのだ、そこからは常に同じ方向にむかって。ぼくは予期していたのだった、ぼくの子供はその方向を発見することはないだろうと。それのみかずっと以前には、ぼくはその子が自分の歩むべき道すら見出しえないかと案じたことだった。愚かな僕はその方向を子供が発見することはないかと心配していたのだった。

ぼくは立上り、水道の水を掌（てのひら）で二三度すくっては顔にふりかけた。この子供を、ぼくはもう望んではいなかった。その子が余りにもよくことをわきまえ誰の足跡にでもよくついていくことの出来るのをみて、ぼくはその子を憎んだ。

ぼくはあちらこちらと歩きまわり、人間の生みだしたすべてのものにぼくの憎しみを吐きかけてやまなかった。路面電車の軌道、家屋番号、肩書、時間割、これら秩序と呼ばれる紛糾したつくりものの乱

雑さに対して。塵芥運搬、講義題目一覧表、戸籍役場など、誰も逆らえぬ、そして誰も逆らおうとしないこの下らぬ組織に向って。それらはぼくの身をいけにえとして求める祭壇であった、しかしぼくは、この子供を捧げようとは望んでいなかった。なにゆえにぼくの子供にそれが求められよう。この世の秩序を彼がもたらしたのではなく、この世界をととのえることもなく、この世を損うことに彼が力をかしたこともなかったのに。なぜその子は、その組織の中にくみこまれて了ったのだろう。ぼくは戸籍役場に、学校に、兵舎に向って叫びかけた。彼に機会を与えてくれ！駄目にならないうちに、ぼくの子供にただ一度の機会を与えてくれ！ぼくがぼくの息子をこの世に送り出し、彼を自由にするためになにもできずにいるのでぼくは自分に対して怒りをぶちまけた。ぼくに罪があるのだ、ぼくがなんとかしなければならない、彼と一緒に出かけていかねば、彼とともにどこかの島へひきこもらねばならないのだ。しかし、どこにこんな島が、一人の新しい人間が一つの新しい世界をそこから創りだせるような島がどこにあるのだろうか。ぼくは子供とともに捉えられ、このむかしからの世界とともに在るようにと宣告されていたのだ。だからぼくはこの子供をうみおとした。ぼくの愛からうみ出したのだ。この子供には何でも出来るのだ、ただ一つ、この悪魔の圏を空き破りそこから外に出ることだけを除けば。

フィプスは学校に上るまでのときを遊び暮した。彼はまさに最も正確な意味で遊び暮したのだった。ぼくは彼に遊びを教えた、しかしのちになって彼が覚えたそんな遊びではなかった。隠れんぼうやかぞえ歌あそび、泥棒ごっこなど。ぼくは全く別な本当の遊び、人の知らない童話を教えたかったのだ。しかしぼくには何も思いつかなかった。そして彼はただ人真似をつづけていた。それは不可能と思われてはいない、しかしぼくたちのようなものにとって逃げ路はないのだ。全てのものは上と下、善と悪、明

と暗、量と質、敵と味方と相も変らず二分され、寓話の世界の生きものや動物たちが姿をみせる国でも、それらはすぐにまた人間の恰好に早変りするのだ。

ぼくには彼をどのように、そしてどんな目標に向って教育してよいのかもう分らなくなった、それでぼくはそれを止めて了った。ぼくが彼のことに気を使わなくなったことにハンナは気づいた。ぼくたちは一度そのことについて話し合ってみた、そのとき彼女はぼくを化け物でもみるようにじっとみつめるのだった。彼女は立上り、言葉をさえぎり、子供部屋に入って了ったのでぼくは全てのことを口に出すことが出来なかった。それは夜だった、そしてこの夜以来、それまではぼく同様殆んどそんなことに考え及ばなかった彼女が、子供とともにお祈りを始めたのだった。わたしは疲れています。やすみます。神さま、わたしを信心深い女にして下さい、とこんな具合だった。ぼくはそれも気にとめなかった、そしてそれらはたぶん彼女の演出目録（レパートリー）のなかでぐるぐるまわりをしている様子だった。ぼくは、彼女がそうすることで彼をなにかの庇護のもとにおこうと望んでいると考えた。十字架やマスコットそして呪文のようなものはなんでもよかったのであろう。たしかに、彼女は正しかった、というのもフィプスはやがて狼たちの仲間入りをし、狼たちとともに吠えだすであろうから。「神様がお命じになった」それはあるいは最後の可能性であったかもしれぬ。ぼくたちは彼をこしらえたのだ、みんな自分の流儀でそうしているのだ。

フィプスが悪い成績をもらって学校から帰ってきても、ぼくはなにも言わなかった、慰めもしなかった。ハンナはひそかになやんでいた。昼食のあと、彼女はきまって子供のそばにいてその宿題をたすけ、質問をしてやった。彼女はそうしたことを他の人々と同じようによくできた。しかしぼくはそれが良いこととは思っていなかった。フィプスがギムナジウ

ムに入るかどうか、彼がなにかまともな人物になるかどうか、ぼくにはどうでもよかった。労働者はその息子に将来の医者をみ、医者はその子に少くとも医者になってほしいと希う。ぼくにはそれが理解できないのだ。ぼくはフィプスをぼくたちよりも利口だとも、より優れているとも考えようとしなかった。ぼくはまた、彼から愛されようとも望まなかった、彼はぼくの言いつけに従うことも、ぼくの意に副う必要もなかった。いや、ぼくが望んでいたのは・・・彼はただ最初から始めねばならず、彼がぼくたちの表情を真似し自分のものにしてはならないということをただみせてくれさえすればよかったのだ。しかしぼくは彼になにも見つけださなかった。ぼくは新しく生まれた、しかし彼はそうではなかった！ぼくはそうだった、ぼくは最初の人間で、全てを賭けて敗れた、ぼくはなにも果さなかったのだ！

ぼくはフィプスのために全くなんにも希わなかった。ぼくはただ彼を観察しつづけた。一人の男が、じぶんの子供をこんな風に観察してよいものかどうかをぼくはしらない。それはまるで科学者がひとつの「事象」を取扱うようなものだった。ぼくはこの何ら望みを托しえぬ人間という事象を観察した。ハンナは彼に対する失望を抱かせなかったから、ぼくは彼を見捨てて了う訳にはいかなかった。しかし、この子供を、ぼくは彼女に対してと同じように愛することはできなかったのだ。ハンナは、ぼくたちの出会い以来、生まれつき美しく教養を備え、少しばかり変ったところもあるが、かといって特別な人間ではなく、一人の女としてそして後にはぼくの妻として、ぼくと同じ尋常の人間だった。ぼくは子供とぼく自身とを裁きにかけた、つまり彼はぼくの最高の期待を裏切り、ぼくは彼のために大地を用意してやれなかったがゆえに。彼が子供であることのゆえに、ぼくは彼に期待したのだ。この子が世界を救うことを。彼にはもの凄い力がひそんでいるような気

がしていた。じじつぼくはこの子供をそれにふさわしく取扱った。しかしぼくの望んだものは、じつはすこしも物凄いことではなかった。ぼくはただぼく以前のものがしたようには、その子にしてやらなかったというだけのことなのだ。ぼくがハンナを抱き、その暗黒のふところに身を休ませているとき、それはぼくの念頭にはなかった——ぼくは考えることが出来なかったのだ。ハンナと結婚したことは良かった、子供をつくるというだけではなく。しかし時がたちぼくはもう彼女とともにいることに幸福ではなくなり、ただ、彼女がこれ以上は子供をこしらえないでいてくれればとのみ考えるようになった。彼女はそれを望んでいたのだ。彼女はもうその話をすることはなく、そんなそぶりもみせなかったけれども、ぼくにはそれと察する根処があったのだ。ハンナがいまこそ新しい子供のことを考えているとひとの目には映った。しかし彼女は石の壁にかこまれているのだ。彼女はぼくのもとから去ることもなく、ぼくのところにくることもない。ぼくたちの争いは普通のひとたちの間に交わされるたぐいのものではない。彼らには、死と生との間に横わるようなこの不可解さをのりこえることはないのだ。当時彼女は完全な養育をよろこんでしていたはずだ、それを妨げたのはぼくだった。彼女にとってあらゆる条件は都合よく、ぼくに適するものは何ひとつなかった。あるときぼくたちが、口論したとき彼女はぼくに、フィプスのために必要なありとあらゆることをぼくに説明した。**すべて**。もっと光のゆたかな部屋、もっと多くのヴィタミン、水兵服、さらに多くの愛情全き愛、つまり愛の蓄電池を彼女は設置しようとしていた、それは生涯を通じて事たりるはずのものだった。外の世界のため、人々との交際のため・・・立派な教養、外国語など彼の才能を見つけようと努力した。ぼくがそれを笑うので彼女は泣いて恨みごとをいった。フィプスが「外」の人間たちに所属するであろうこと、彼がそうした人たちと同様ひとを傷つ

け、侮辱し、ひとをだまし、殺したりすることがあるだろうとは、彼女は瞬時たりとも考えたことはないとぼくは思う。ところがぼくは、そうしたすべてのことを確たるいわれのもとに予想していたのだ。というのも、ぼくたちの名ずけている悪というものは、膿(うみ)の根のように子供の中に巣くっているものなのだ。ナイフの事件について、だからぼくはなんにも考えてみる必要はなかった。それは彼がおよそ三・四才の頃よりも早く始った。彼が怒りをぶちまけわん〳〵泣き叫びながらいったりきたりしているのにぼくは出くわした。彼が遊んでいた積木の塔が彼の方に倒れかかったのだ。火のついたように泣いていた彼が急に泣きやみ、低い力のこもった声で言った。≫おまえたちの家に火をつけてやるぞ。みんなぶっこわしてやるんだ、おまえたちをみんなぶっこわしてやるんだ。≪ぼくは彼を膝の上に抱きあげ撫でてやり彼にその塔をまた積んであげるよと約束した。しかし彼はその脅迫をまたくりかえすのだった。そこへやってきたハンナは、最初はなんのことかよく判らなかった。彼女は子供を訓(さと)し誰からそんな言葉を習ったのかと尋ねた。≫誰からも(ニィマント)≪と彼ははっきり答えた。

その後彼は同じ建物に住んでいた少女を、階段から突きおとした。彼はきっとひどく驚いたのであろう、泣き、もう二度としないと約束した。そして同じことをまたくりかえしたのだった。事ごとに彼がハンナのうしろから手をふりあげてみせるようなある時期があった。その日々もまたすぎ去った。

彼は多くのあどけないことを口にし、人の目にもかわいくうつり、まっかな頬をして毎朝目をさました、そんなことを自分に言ってきかせるのをぼくは勿論忘れている。ぼくだってそうしたことはみんな気付いていた、そんなときすぐに彼を抱きあげ、ハンナがするようにキスしようという気にはよくなったものだ。しかしぼくは、そうすることでぼくの気を静め、自己をあざむくことを望まなかった。ぼく

は用心していた。というのは、ぼくの望んでいたものは決して超人的なものではなかったから。ぼくは自分の子供に何も大それたことは予想していなかった、しかしこの瑣細なことを、このすこしばかりの異常さをぼくは希っていたのだ。一人の子供がフィプスと呼ばれるとき・・・彼の名にこの栄誉が加えられねばならなかった。愛頑用の犬にもにたこのよび名と、すべての出来ごとは関係があるのだ。調教につぐ調教の十一年はいたずらに過ぎていく。（きれいなおててでごはん。まっすぐあるきなさい。お口を一杯にしておしゃべりはいけません。）

彼が学校に通いだして以来、ぼくは家よりも外で多くの時間を過すようになった。カフエでチェスをしたり、仕事を口実に自分の部屋にとじこもり読書にふけった。マリア・ヒルファ通りのある売り子ベティと知りあいになり、その子に靴下や映画の切符、あるいは食べものをもっていってやったりした。そして彼女はぼくに親しみをみせるようになった。ぶあいそうでぱっとしない、引っこみ思案な娘で、なんのすることもなく夕方の時間をすごす彼女は、せいぜいのところ何か食べたいというくらいであった。ぼくはかなり足繁く彼女を訪ねた。一年間、ぼくが彼女の下宿部屋でベットに寝そべり葡萄酒のひとびんを空にするあいだ、彼女はぼくの横で雑誌を読み、そしてぼくの理不尽な要求に何のいぶかりも示すことなく従ってくるのであった。それは全くとんでもない惑乱の時期であった、子供ゆえの。ぼくはベティと一緒に寝たことはなかった、それどころかぼくは、自慰を、女とその性からの徹頭徹尾の解放を求めていたのだった。摑まえられることのないように、かかわりをもつことのないようにと。ぼくはもはやハンナのそばには身をおこうとしなかった、そうすればぼくは彼女に屈服をすることになったであろうから。

夜の外出をぼくはそう長い間かくそうとしなかったのに、ハンナはまるで疑いを抱かぬような毎日で

あった。ある日のことぼくはそうでないことを発見した。彼女は、ぼくたちがよくつとめのあとで落ち合う、カフェ・エルザホーフにベティとぼくがいるのをすでにみたことがあり、そのすぐ二日あと、映画の切符を買うためにぼくとベティとがコスモス座の前で順番をまっているのを目にしたのだった。ハンナの態度は非常に変っていた、他人のようにぼくを流し目で見て、反ってぼくはどうしてよいのか分らなかった。ぎこちない身振で彼女にうなずいてみせ、ベティの手をぼくの手に感じながら、あとから考えてみても全く信じられないことなのだが、切符売場の方に歩みより、本当に映画館の中に入って了ったのだった。映画をみている間、ぼくはハンナの非難とぼくの弁解をあれこれと思いめぐらしていた、そのあとは早く家に帰れるようにとタクシーをひろった、まるでそうすれば少しは事情を好転させあるいは不祥事を妨ぎうるかのように。ハンナが一言もいわなかったのでぼくは用意してをいた弁明にとりかかった。彼女は頑なに黙っていた、まるでぼくが彼女とはなんの関係もないことを彼女に話しているかのように。それでも彼女はついに口をひらいて、ひかえめに、ぼくが子供のことを考えてほしいと言った。≫フィプスのために・・・≪、この言葉が口にされたのだ／彼女の困惑ゆえにぼくは打ちのめされた、膝まずき、二度としないことを誓った、そしてぼくは本当にベティには再び会わなかった。それでもぼくが二度の手紙を彼女に書いた理由をぼくは知らない、そんなものに彼女はなんの価値もおいてはいなかったのだ。返事はこなかったしぼくも期待していなかった。まるでこれらの手紙が、ぼく自身かハンナ宛に書こうと望んでいるようにぼくはその中でやけくそなことを書いた、それはかつて誰に対してもなかったことだった。ときにぼくはベティから恐喝をうけないだろうかとびくびくした。なぜ恐喝をうけるというのか。ぼくは彼女に金を送った。一体どうしてだろう、彼女のことをハンナは知って

いたのだからとでもいうのか。

この惑乱。この荒廃。

ぼくは男として否認された不能者のように感じた。そのまゝでいたいとぼくは希った。勘定書があればそれはぼくの名において清算されるのだ。性からの脱却、終末、ただそれ以外には行きつくことのない終末に向って。

しかし生起した全てのことは、なにかぼくやハンナあるいはフィプスに関係があるのではなく、父と息子、罪と死に関するものなのであった。

ある本のなかでぼくはかつて次のような文句を読んだことがあった、≫頭をあげるは天の習いならず≪。天の悪習についてのべているこの文の意味を全ての人たちが承知してをればよいのであるが。いや、見下したり、彼のもとで、途方にくれているものに合図をしてやったりすることはきっと天の習いではないのだ。この暗黒の劇が演じられているところ、そこでは天もまた共犯者なのだ。少くともこの場ではそのようなことがあってはならない。それは、血によって終りを告げた、頭にひらく傷口より流れでる、なりひびくばかりに光り輝く子供の血によって。

彼は谷あいのつき出た岩の上に横っていた。最初に彼のところにやってきて ≫きみ≪ と呼びかけた生徒に彼はもの言うことができなかった。彼は手をあげ何かを示そうとしまたその子にすがりつこうとした。しかし手は上らなかった。ほんのすこしおくれてやってきた先生が彼のうえにかがみこんだとき、それでも彼はつぶやくように言った。

≫いえに帰りたい≪ と。

この言葉ゆえに彼がハンナやぼくを慕っていたと思いこむことをぼくは警戒しよう。死を予感するときひとは家に戻ろうとする。彼はそれを感じたのだ。彼は一人の子供であった、なんの大きな使命も托されてはいなかった。フィプスはただ全くありきたりの子供であった。なにものも彼のこの最後の想いを妨げることはできなかったのだ。他の子供たちと先

生は丸太を探し担架を作った、そして彼を上の村まで運んだ。途中で、殆んど彼らの一足が踏み出されたとき、彼は死んでいた。あの世にいった？息をひきとった？死亡の挨拶状にぼくたちは書いた。≫・・・に私どものひとりの子供は・・・不幸な運命によって私たちから奪い去られました。≪印刷屋では注文をうけた男が、ぼくたちは≫私どものただひとりの最愛の子供≪と書かないのかと尋ねた、しかし電話口にいたハンナはいいえ、愛され、この上なくいとおしがられて、というのは当然のことです、そんなことは全くどうでもよいことなのです、と言った。この説明をきいてぼくは愚かにも彼女を抱きよせようとした、それほどにぼくの感情は彼女にひとつとなっていた。しかし彼女はぼくを押しやった。彼女はそもそもぼくを認めているのだろうか。この世の全てのことに彼女はどんな非難をぼくに投げつけているのであろうか。

ずっと以前からひとりでフィプスの面到をみてきていたハンナは、どこにいるのか判らないような毎日をおくっている。それはまるで、彼女がフィプスと相つれだって舞台の中心に立っていたとき、彼女を照らしだしていたスポットがもうその上にはむけられていないかのようである。なんの個性も特徴ももたぬ人間のように、彼女のことはなにもひとの口にのぼらなくなった。以前の彼女は楽しそうで元気があった。心配そうな顔付で優しいなかにも厳しさがあり、子供を自由にさせているかと思うとまた自分の方にしっかりとひきよせるという具合に、子供をあやつることにかけてはいつも身構えを怠らなかった。例えばあの小刀事件のあと、寛容と聰明さに輝くばかりの彼女には生涯の最も美しい時が与えられていた。子供の行い、その誤ちは自分の責任であると認めあらゆる裁きにすゝんで服した。それはフィプスの三年生のときのことだった。彼がポケットナイフを手にして、ある同級生にとびかかったのだ。彼は胸を目がけた、ナイフは滑ってその子供の腕に

突きささった。ぼくたちは学校に呼びだされた。校長やその他の先生たち、けがをした子の両親たちとの話しあいは苦しかった——苦しい、それはフィプスのしたことが全く別なことを目指していたことをぼくは知ってをり、しかしそれを口に出すことが許されないゆえの苦しさ——ひとびとがぼくに押しつけた観点について、ぼくが全く考えてみようという気にならなかったゆえの苦しさであった。ぼくたちがフィプスとともになすべきことは悉くあいまいだった。彼は泣きじゃくり、反抗的だったと思うとやけくそになったりし、そしてようやくおしまいと判ると、生じたことを後悔した。それでも傷をうけた子供のところへいって謝まらせることは出来なかった。ぼくたちは無理やりに彼をつれ、三人で病院に出かけたのだった。しかし、フィプスがその子供を脅かしたときその子に対してなんら悪意を抱いていたのではないとぼくは思う、そして彼がそれを口にしたその瞬間に、その子に対するにくしみが始ったのだ。彼の心の中にあったものは決して子供の腹立ちまぎれのものではなく、非常な自制のもとに大きく育まれ鋭くとぎすまされた憎しみであった。誰もその渕をのぞきこむことを許されぬ重い感情が彼のうちに成熟し、彼は人間へと生長していた。

全てがおわったあの遠足のときのことを想いだすといつでも矢張りこの小刀事件のことが浮んでくる、まるでこの二つが因果の環につらなるものであるかのように。それは、その衝撃ゆえに自分の子供の存在を再びぼくの記憶のうちに呼びさますのだ。それというのも、この事件を除けば、この数年間の学校生活はぼくの想出に残るものとてはなく、それはぼくが彼の大きくなること、理解力や感受性が増していくことに注意を払わなかったためなのだ。多分彼も、その年頃の子供たちと変ることはなかったのだろう、可愛いらしく、ときに大きな声をだしたり黙ったりして——それらの全てはしかし、ハンナにとっては特別のそしてただ一回限りのものであっ

たのだろう。

事務室にいたぼくのところに校長先生からの電話があった。そんなことはかつてなかった。あの小刀事件のときですら家の方に電話がかかり、そのあとでハンナがぼくにしらせたのだから。三十分後、会社のホールでぼくはそのひとに会った。ぼくたちは通りの向い側のカフェにいった。彼が言わなければならないことを、まずホールでそれから通りで、彼は口に出そうと努力していた。しかしカフェでも彼はそこがふさわしい場所でないことを感じた。ひとりの子供が死んだということを告げるにふさわしい場所はおそらくどこにもないであろう。

それは先生の罪ではありませんと彼は言った。

ぼくは頷いた。ぼくにはそれで良かった。

道の状態は良好であった、しかしフィプスがクラスから離れていったのだった、元気なあまりか好奇心からか、あるいは杖でも探そうとしたのかもしれない。

校長は口ごもりながら話し始めた。

フィプスはとある岩の上で足をすべらし落ちてその下の岩にぶつかったのである。

頭の傷は危険なものではなかった。しかし医者はその後急激な死の理由を発見した。父と子。息子——この把握しえぬものの存在すること。いまぼくにはこの言葉が浮んだ、なぜなら、このくらい事象のためには明晰な言葉は存在しないのだ。そのことに考え及ぶとき、ひとは理解の力を失うのだ。くらい事象、つまりはぼくの精液、定めがたくぼく自身にすらうちとけることのないもの、そしてハンナの血液、その中でこの子供が養われ、その誕生が導かれた、一つのくらい事象へとこのすべてのものは合一するのだ。そして嚢腫(のうしゅ)がありました、多分ご存じでしょう・・・ぼくは頷いた。嚢腫、それがどんなものかぼくは知らなかった。

学校は大変な騒ぎになりました、と校長は言った。調査委員会が設けられ警察に届けがだされまし

た・・・

ぼくはフィプスのことを考えてはいなかった、先生が気の毒だった。そしてぼくの方に対する御心配はいりません、とうけあった。

誰にも罪はないのだ、誰にも。

ぼくは卓の上に一シリングをおいて立上った、まだ何も注文していなかったのだ、そして我々は別れた。ぼくは事務室へ帰ったそしてまたすぐに出かけた、カフエにいきコーヒーを飲んだ、むしろコニヤックかシュナプスでものみたかったのだが。一杯のコニヤックを飲む勇気がぼくにはなかったのだ。ひる休みの時間だった、ぼくは家に帰えりハンナにそのことをいわねばならなかった。ぼくがそれをどのようにやってのけ、どんなことを言ったのかぼくは知らない。ぼくたちが入口から次の間を通っていくあいだに彼女はその意味を承知したにちがいない。それはあっという間に生じた。ぼくは彼女をベットにつれていき医者を呼ばねばならなかった。彼女は思慮分別を失っていた。そして意識を失ってしまうまで叫びつづけていた。彼女の叫び声は、フィプスが生まれるときと同じようにものすごいものであった。そしてぼくはあのときと同じように、彼女のまわりで震えていた。ただハンナの身に何ごとも生じないようにと再び希っていた。絶えずぼくは案じつづけた、ハンナ！と。そして子供のことは一度も。

続く数日、ぼくはひとりでなにもかもやってのけた。墓地では——ぼくは埋葬の時間をハンナにはかくしていた——校長が告辞をのべた。それは美しい日だった、花環につけられたリボンはお祭りの日のようにそよ風に舞っていた。校長の話はなおも続いた。はじめてぼくはクラスの全員をみた、フィプスが殆ど毎日の半分を一緒にすごした子供たち、ぼんやりと前を眺めつづけている小さな男の子たちの一団、そしてその中に一人、フィプスが突きさそうとした男の子をぼくは知っていた。一筋の寒気がぼくを襲った。それは最も近いものと最も遥かなものと

が一挙にぼくたちからひきさらわれて了ったとの想いであった。墓はまわりのものと花環とによってさえぎられていた。中央墓地全体をこえて遠く東の地平線の彼方にまでぼくは目をやった、そして誰かがぼくの手を抑えたときにもぼくはまだその圧迫を感じただけで遠くの方に生徒たちの顔をしかしまるですぐ近くからのようにはっきりと見ていたのだった、でもそれはずっとむこう、はるか彼方のものだった。

影の言葉を学ぶんだ！ひとりで勉強するんだよ！

しかしいま、全てが終り、ハンナが何時間も彼の部屋にとぢこもることもなく、フィプスがなんども駆けぬけていたドアを閉めてもよいとぼくに言うようになって以来、ぼくはしばしば彼に話しかけるのだ、その言葉をぼくは正しいとみなすことはできないのだが。

わが不肖の子よ、わがたましいよと。

ぼくは彼を背に負い、青い風船を、アルテ・ドナウの船あそびを、そして切手を彼に求めて与えようとする。彼が転ぶと、ぼくはその膝に息をふきかけてやる。ぼくは比例の問題を手伝ってやるのだ。

ぼくがそうすることで彼を元気にしてやれなくても、なおぼくには考えるゆとりがあった。ぼくが彼を、この息子をこんなふうに育てあげたのだと。ぼくたちのつながりが余りにも深くなりすぎたので、ぼくはもはや彼に親しくしてやることができなかったのだ。

遠くへいってはだめだよ、まず歩くことを学ぶんだよ、ひとりでやってみるんだよ。

しかしこのひとりの男からひとりの女にかけわたされたこの悲しみの弧がまずうち壊わされるべきであったのかもしれない。沈黙をもってのみ測りうるこの距りをいかにしてうつしとることができよう。全てのなかに時間は流れこんでいく、ぼくのための地雷原、そしてハンナのための花園のなかにも。

もはやぼくは考えることをしない、立ちあがり、

暗い行程を彼方へと歩み、ひとことのもの言うこともなくハンナのもとに至ろうとおもう。そのあとに来るべきことはなにものも予想しないのだ、彼女が支えてくれるかもしれぬぼくの両手も、彼女の口にあわされようぼくの口のことも。ぼくが彼女のもとにやってくるとき、一つ一つの言葉がどんな音で始まるだろうか、ひとつひとつの交感がどのような温かさをもっているだろうかというようなことは重要ではない。ぼくの訪れは、彼女をとりもどすためではない、彼女をこの世界に引きとめそして彼女がぼくをこの世界に引きとめるためなのだ。優しく憂いに沈む和合のうちに。この抱擁のあとに子供たちがやってくるとき、来るがよい、こゝに生き成長し、ひとしなみの生命をもやすがよい。ぼくはクロノスのように彼らを呑みつくし、狂乱の父の鞭を加え、この聖なる動物たちを思いのまゝにふるまわせ、そしてリア王のように欺かれるにまかせよう。ときが求めるまゝに彼らを育てるだろう、半ば狼たちの習いを求めて、半ばは良俗の理念を目指して——そしてぼくは彼らの旅立ちにどんなはなむけもおくることはしないだろう。ぼくの時代の一人の男のように、持ちものも、よき助言もなく。

しかしぼくには、ハンナがまだ目を覚ましているかどうか分らない。

もう考えることを止めよう。肉は強靱で憂いにみちている。それは大いなる夜の哄笑のもとにまことのおもいを秘めている。

ハンナが目を覚ましているかどうか、ぼくはしらない。

× × ×

"Alles" aus dem Erzählungsband "Das dreißigste Jahr" von Ingeborg Bachmann, R. Piper & Co. Verlag München 1961, übersetzt mit freundlicher Genehmigung des Verlags.